



イスタンブール日本人学校 帰国報告

石狩市立南線小学校
教諭 宮浦 匡典

1 トルコ共和国 イスタンブールについて

トルコの首都は、アンカラ。しかし、この国の中心は1350万人が住むイスタンブールである。そして、街を東西に分けるボスポラス海峡が、アジアとヨーロッパの境目といわれている。その境目にふさわしく、ここでは、文化や人々において、東洋と西洋の両方を感じることができる。

以下にトルコ共和国の基本情報を記す。

～トルコの基本情報～

首都 アンカラ

面積 78万平方キロメートル（日本の約2倍）

人口 7800万人（イスタンブール1400万人）

民族 トルコ人（南部にクルド人 他）

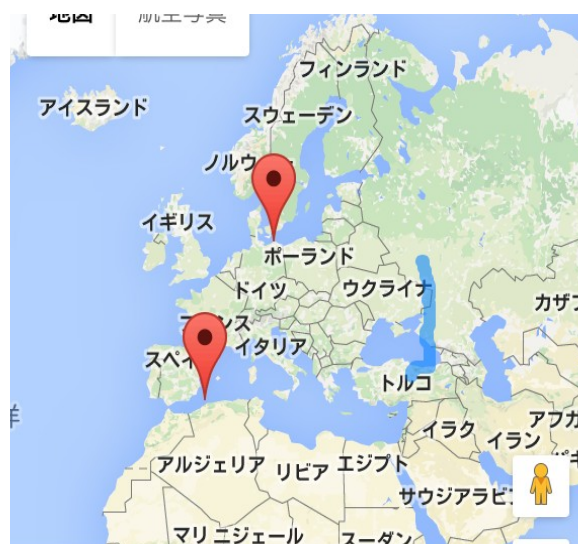
エルドアン大統領（公正発展党 AKP）

*クルド労働者党（PKK）

イスラム教原理主義 ISIL

言語 トルコ語

宗教 イスラム教



Google マップ



イスタンブールの街

アジアとヨーロッパにまたがる、イスタンブール。アジアとヨーロッパの文化を背負っており、歩けば歩くほど、文化の奥深さを感じる。ボスポラス海峡を挟んで、アジア側とヨーロッパ側に分かれており、さらに、ヨーロッパ側は、旧市街と新市街に分かれている。

アジアとヨーロッパを結ぶボスポラス大橋

イスタンブールの人

身近な人に目を向けると、子ども好きな人が多い。トルコでは、“トルコの父”と称されるアタチュルクが、教育の重要性を説き、子どもは国の宝とされている。また、お年寄りを大切にすることも多い。バスには優先席はないが、お年寄りが乗車してくると、必ずすぐに若者が席を譲る。

イスタンブールの食

あまり有名ではないかもしれないが、トルコ料理は世界三大料理の一つである。味付けは、塩コショウが中心。香辛料をあまり使わない日本食と共通点があり、何でも美味しく食べられる。肉料理のケバブ、スープのチョルバなどが有名である。そして、食後のチャイ（紅茶）は欠かせない。

2 イスタンブル日本人学校の特色



旧イスタンブル日本人学校校舎

現在、教室が手狭になったり、スクールバスの座席が足りなくなったりと、その対応に迫られている。小中ともに、日本の学校よりも時数が多い（小1～中3まで7時間授業。＊水曜は6時間）ので、子どもたち、教師ともにハードな毎日を送っている。授業は教科担任制。職員室は一つで、職員が担当の教科を小学生、中学生の両方に教えている。

ただし、帰国後、今年の夏に新校舎へ移転になったとの情報が入った。昨年7月に校舎隣で銃撃事件が発生し、講堂が被弾した。その直後から防弾壁の増設に合わせて、新校舎探しを行っていたが、無事に引越しが終わったと聞いている。

本校は、小学部1年生から中学部3年生までが一つの校舎で学んでいる。児童生徒数は、75名前後。校舎は、民家を改築して使っていた。小さな校庭はあるが、体育館がないため、近くの施設を借りて、体育の授業を行っている。また、最近では、新規の日系企業も増えてきており、それに伴い、児童生徒数は増加傾向にある。

【当地の教育環境】

スタンブールには、約110社の日本企業が進出し、約2000名の日本住み、そのうち約100名の義務教育年齢の子どもたちが住んでいま、本校には小中学部の子どもたちが、日本と同じカリキュラムのも、学習を進めています。

【本校の特色】

国際社会の中で活躍できる人材の育成」

生涯を通じて自ら進んで学習し、国際社会の中で活躍できる児童生育成のために、「学力の向上」、「国際理解教育の充実」、「心身健康」を重点目標としています。

「学力の向上」では、全学年が一齐にバス下校するために、毎日7日までの時間割設定が可能です。その時間割を工夫し、主要教科の時数を標準時数より10%以上増となるように組み、少人数指導とをて、基礎学力の定着・向上を確実に出来るように工夫しています。

「国際理解教育の充実」では、現地理解教育を積極的に進めていま、学年毎に現地校との交流が行われ、トルコの文化に触れると共に本文化にも触れる機会をもち、理解を深めています。また、外国語では、小学部1年生より英語の学習を行っています。小学部の授業、学習指導要領でねらう「言語や文化についての体験的な理解」、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」、「音声や表現慣れ親しみ」に重点をおき、指導しています。英検については、本において2級までの受験が可能です。

「心身の健康」では、本校には運動場がないので、体育の授業は外体育施設を借り、スクールバスで通っています。狭い運動場でも量確保の工夫をしようと「部活動」も行っています。「球技部」「部」に、子どもたちは集中して真剣に取り組んでいます。文化系の動も「和太鼓部」「英語部」があります。

右：イスタンブル日本人学校 HP 一部抜粋。
重点目標は、「学力向上」「国際理解教育の充実」「心身の健康」の3つ。

▼日本人学校のある日の出来事



▶▶ 4月23日
トルコではこどもの日で祝日です。この祝日を利用して、5・6年生は、現地校に行き、太鼓を披露しました。練習の成果もあり、たくさんの拍手をいただきました。



▶▶ 4月25日
彬子女王殿下御来校。女王殿下は、ヒゲの殿下の愛称で親まれた寛仁親王のご長女です。日本・トルコ協会総裁であることから、お越しくございました。本校の校歌を聞き、大変喜んでくださいました。



▲6月4日～6日

今年の修学旅行は、アンカラ・カッパドキア方面でした。5年生から中学3年生までが参加しました。キャップファイヤー等もあり、宿泊学習と修学旅行の要素が両方入っています。今年は修学旅行の担当となりましたが、中学部の生徒たちが中心となって自主的な取り組みを行い、自分たちで作り上げる楽しさを味わえたのではと感じています。

3 実践報告 ～現地理解教育と外国語教育と通して～

(1) 現地理解教育の実践

1 2013年度の実践から

～セズイン校との交流～

11月に現地にある私立学校、セズイン校との交流を行った。日程調整がなかなか難しく、交流の日までに時間がかかったが、実現することができた。交流は、午後からの2時間、バンド部の5名が来校した。本校からは、中学部1～3年の13名が参加した。



習字を教える様子

5時間目は、日本の文化を紹介した。習字グループ・日本の遊び①（折り紙、だるま落とし）・日本の遊び②（羽根つき）の3つのグループに分かれ活動した。生徒たちは、英語とトルコ語を交えながら、コミュニケーションを取っていた。日本での交流の時から思っていたことだが、交流の内容を“体験的なもの”にすることで、お互いの距離が縮まり、かつ、言葉の心配をあまり気にせず交流できるということを改めて実感した。



セズイン校のバケツを使った演奏

6時間目は、太鼓の交流をした。セズイン校の生徒がバンド部ということで企画した。本校の生徒たちも、これまで、和太鼓に取り組んできたので、まず、和太鼓の演奏を披露した。そして“ばちの持ち方や姿勢”を教え、簡単なリズムの演奏をした。その後は、セズイン校の発表だった。バケツを使って自分たちの考えたリズムを発表してくれた。トルコの子たちも、日本の子たちも、お互いの発表にとっても興味をもち、目を輝かせていた。互いの文化を知る有意義な交流となった。



和太鼓を教える様子

2 2014年度の実践から

ア BK校との交流



▲アシュレイ作り

トルコのお菓子の作り方を教えてもらい、一緒に作りました。

一年を通して、5・6年生合同でBKという現地校と交流を行った。BKを訪れた時は、ギョズレメ（トルコのクレープ）とアシュレイ（お菓子）作りをした。

そして、12/11（木）の交流では、BKの子どもたちが日本人学校を訪問してくれた。3つのグループに分かれ、習字・はし・手遊びの日本の文化を伝えた。トルコ語と英語を交えた交流で、積極的にコミュニケーションを取りながら活動する子どもたちの姿が見られた。

イ パース日本人学校とのSkype交流12/10(水)

オーストラリアのパース日本人学校の6年生と、本校の6年生がSkypeで交流した。内容は、お互いの街と学校紹介だった。時差が6時間。イスタンブール時間：8時45分、パース時間：14時45分に開始と、お互いにギリギリの時間帯だったが、無事に交流を終えることができた。

イスタンブールからは、クイズで、「イスタンブールであまり手に入らないお肉は何でしょう。」「A：羊 B：豚 C：牛 D：鳥」と出題。正解は、B。理由はイスラムの国なので、豚肉を食べない人が多いことを伝えると、パースの子どもから「なるほど。」という声。また、質問コーナーで「イスタンブールにはたくさんの世界遺産がありますが、オーストラリアには、いくつありますか」とたずねると、オーストラリアの方が多くことがわかり、子どもたちからは驚きの声が上がった。初めての試みだったが、お互いの国について理解を深める有意義な時間となった。



パース日本人学校の説明を聞く
子どもたち



トルコの食べ物クイズを出す
子どもたち

(2) 外国語教育の実践

①指導者と指導方法

3年間、英語教育に携わった。在外教育施設では、外国語学習への期待は大きい。そこで、日常の授業はもちろん、指導体制や指導方法については、運用可能な範囲で工夫し、実践した。

【2015年度の例】

ア 小1～小6 週2時間 1時間JET コミュニケーション+ライティング
1時間ALT+JET コミュニケーション中心

イ 中1～中3 週5時間 3時間JET 教科書中心
1時間JET+ALT スピーキング & リスニング 中心
1時間ALT+JET 総合英語 オリジナル教材

(物語文等を使っでの学習)

ウ 英語タイム 週3回10分間 担任が指導

小1・2 週2回 ペンマンシップ 週1回 英語の歌

小3～中3 週2回 学校ミニ英語検定 週1回 英語の歌
 *1学期・2学期 英語の歌発表会 3学期 全校で英語の歌の合唱

②英語の歌発表会～2014年度の実践～

12月12日に、英語の歌発表会が全校児童生徒で行われた。これは、今年度の後期から始めた新たな取り組みである。本校では、授業終了後の週3回、10分間の「英語タイム」を行っている。内容は英単語や英検対策を中心に取り組んでいた。この発表会は、そのうちの1回を英語の歌練習にあて、その成果を発表しようという試みである。

初めての取り組みだったものの、各学年とも工夫を凝らした発表で、大変盛り上がった。2学期は、2学年ごとの発表だったが、3学期は、全校で一曲を仕上げ、卒業生を送る会で発表した。発表会に向け、とても楽しそうに練習する子どもたちの姿があった。



1・2年生の発表

“Twinkle Twinkle”

3・4年生の発表

“Ob-La-Di, Ob-La-Da”

5・6年生の発表

“Top of the world”

中学部の発表

“We are the world”

4 トルコのあれこれ

(1) トルコの伝統芸術にふれて…

▼タイル一枚を拡大すると…



①トルコタイル

トルコで有名なジャーミーの一つ、ブルーモスク。それは、内部を飾る数千の青いタイルから、その名前が付けられた。

卒業制作として、昨年度担任した子どもたちと一緒に、タイル作りに挑戦した。一人一枚のタイルを担当し、8枚をつなぎ合わせて、一枚のタイルを完成させた。制作期間は約2ヵ月。作業後、業者に依頼し、枠をつけてもらい、完成品を見た子どもたちからは、大きな歓声が上がった。とても思い出に残る作品となった。



▲書家のフセインさん、娘、私の写真：トルコ書道と日本の書道

②トルコのカリグラフィー（トルコ書道）

硬い筆（竹や葦を削って作った筆）を使って書く。直線と曲点をうまく組み合わせて書かれたアラビア文字である。左の写真は、書道家のフセインさんと撮った一枚。名前をトルコ書道で書いてもらった。かわりに「私の名前を漢字で書いてほしい。」と頼まれたので、その場で、漢字を考えて書いてみましたが、もう少し良い漢字があったのではと、あとで反省した。

(2) トルコと日本のつながり…8/6おもちゃ博物館

8月6日にイスタンブール市内で行われた日本とトルコの平和記念イベントに昨年に引き続き参加した。これは、トルコのおもちゃ博物館が主催するイベントである。このイベントに本校も招待され、希望者を募り、子どもたちとその保護者が参加した。

日本から遠く離れたこのトルコの地で、このようなイベントが行われていることに感銘を受けるとともに、日本人として深く考えさせられる一日となった。

また、日本でも昨年公開された日本とトルコのコラボ映画「海難 1890」。これは、日本の和歌山県沖で1890年にトルコ船「エルトゥール号」が沈没し、その際、乗組員を日本人が救ったエピソードを描いた作品である。この出来事は、トルコの教科書に記されており、トルコの人たちが親日家である所以とも言われている。映画後半のテヘラン編では、私たちの職員室が使われており、また、たくさん子どもたちや保護者の方が、エキストラとして参加している。



地元新聞
Hürriyet の記事：鶴を折るトルコの子どもたち

◀ 広島 Tシャツを着てイベントに参加するスタッフ

(3) ラマダン (断食月) とバイラム

約1ヵ月間のラマダンが終わり、7月27日からシェケルバイラム (砂糖祭) になった。(2014)

トルコにある祝日の中で、最も重要なのが、断食月明けのシェケルバイラム (砂糖祭) と、その70日後のクルバンバイラム (犠牲祭) である。その前後を含めて1週間ほど、トルコの人々は一斉に休暇に入り、家族のもとへ帰省する。



▲ 学校でのシェケルバイラム。トルコ人スタッフにチョコレートを渡した。

▶▶ クルバンバイラム。屠殺場に行った。家に戻り、さらに細かくさばき、近所の貧しい家々におそそ分けされた。



味付けは、とてもシンプルで日本人の口にもよく合う。香辛料はあまり使っていない。一つ驚いたことは、レストランでの食事は、とにかく外で食べる。だから、テラス席が大人気である。冬でもひざ掛けをしながらも、外で食べていた。



Çay チャイ



Türk Kahvesi トルココーヒー



Kebabı ケバブ



Meze メゼ (前菜)



Çorba チョルバ (スープ)

Kahvaltı カフヴァルティ (朝食)

(5) マルマライトンネル完成

イスタンブールには、アジアとヨーロッパを分けるボスポラス海峡がある。その海峡を渡るためには、海峡に架かる二つの大橋（第1・2ボスフォラス大橋）か、定期船を使う。
それに加え、2014年10月に海底トンネルが開通した。これは、地下鉄専用トンネルである。このトンネルの掘削部分（約1400m）は、日本の大成建設が中心となって進められた。完成式典には、トルコのエルドアン大統領の招待で、安倍首相も出席した。イスタンブールは慢性的な交通渋滞に悩まされていたため、高速専用車道を走るメトロバスや、このマルマライトンネルなどに期待が高まっている。

5 終わりに

(1) これから派遣されるみなさんへ

派遣前、ある先生が、通信に帯同家族の心得について書いていました。それを読んだ妻が、とても役立ったと言っていたのをふと思い出しました。そこで、家族の事前準備について、妻に聞きながら、下にまとめたのでご覧下さい。派遣された経験のある先生に、お話を聞きながら、準備を進めるのがよいと思います。

～帯同家族について～

- 健康診断等は事前に受けておく。特に、歯については、検診や治療を受けておくことが大切。渡航してから苦労している方も多い。
- かかりつけ医に渡航することを相談し、子供用の薬（風邪薬・熱冷ましなど）を処方してもらおうとよい。手荷物で持参するとよい。
- 配偶者研修は、その後の心構えができ、同期赴任の方にお会いし、情報交換ができるので、可能な限り参加した方がよい。どの国にも「配偶者会」というものがあり、その仕組みなどについても詳しく教えてくれ、その後の過ごし方の見通しが立つ。
- 日本語の絵本や本などは、国によってはなかなか購入できないので、お子さんの発達段階（2,3年先）を考慮して準備するとよい。

“派遣1年を振り返って”の文章に、以前このように記した。

- クレジットカードまたはデビットカードを夫婦で1枚ずつ持っているとうよい。（国や場所によりJCBは使えない場合もある。派遣先によっては、赴任当初から強く手取りが足りない場合があるときを感しています。各地域で実践を積んできた職員たちですので、それぞれの考え方ややり方があります。それらから刺激を受け、学ぶことも多いです。同時に、その素晴らしさを認識した上で、マンパワーだけでなく、組織としてどのように進めていったらよいのかを、考えさせられることもあります。様々なカントリーリスクや、危機管理に対応していくためにも、“協力・協調”、そして何事にも“柔軟”に対応できる姿勢をもつことが大切だと、自分自身では考え生活しています。



この思いは、3年経ち、帰国を迎えても変わりはない。また、日本人学校では、日本の教科書を使って授業を進めているが、内容が環境に合わなかったり、教材や教具が手に入らなかったりと苦労することも多い。しかし、大切なことは、だからできないのではなく、知恵と工夫でやれることが必ずあるということである。

帰国して半年経ったが、研修会でトルコのことを伝えたり、札幌でもトルコの人を探し、トルコについて学習を進める中学校を訪問したりした。帰国後も、また新たな“つながり”ができ、うれしく思っている。

